

サーバー統合がもたらす 経営戦略上のメリットを探る

ビジネスでのIT(情報技術)利用が急速に進化中。投資効率の向上や既存のIT資源の活用による大きな効果をもたらすと期待されているサーバー統合。欧米で活用が進むこの技術を日本でも普及させるため、「サーバー統合がもたらす経営戦略上のメリットを探る」と題する日経産業新聞フォーラムが七月二十四日に日経ホール(東京・千代田区)で開催された(主催：日本経済新聞社)。同フォーラムでは、サーバー統合に関する製品やサービスを提供する企業のプレゼンテーションとともに、その必要性やメリットについてパネル討論が行われた。

基調講演 経営視点で考えるITの有効性

明治維新は産業革命による。で主要国首脳会議(洞爺湖サミット)が開かれた。これを革命といえる。産業革命による。明の転換点が来ていると感じれば、それが黒船で日本にやってくることもなく、その後、理由の一つは、産業革命にの動乱も起きな



早稲田大学
大学院教授
前三重県知事
北川 正恭 氏

ビジネスモデルの 変化に期待

新しい国家の統治機構は、ITがもたらす革命によって権力の移行が起きている。そう思う。そう思う意味で、サーバーの統合という新しい考え方と技術によって、ビジネスモデルがどんどん変わっていくことに大きな期待を持っている。



マイクロソフト
サーバープラットフォーム
ビジネス本部
業務執行役員本部長
五十嵐 光喜 氏

① プレゼンテーション Hyper-Vによるサーバー統合の実現

現在のITシステムの問題として、投資額のうち八〇％ほどが保守・運用管理に回されてしまっている。革新に使えるのは二〇％ほどしかないという。問題の解決のために、サーバー統合のメリットを「Dynamic」である。この実現は、「仮想化」と「統合」が柱となる。現在のサーバー運用にかかわる問題は、第一にPCサーバーの台数が増えてサーバーのスペースが足りなくなっていること、第二にエネルギー消費を大きく減らすことが求められていること、第三にハードウェアの性能を

保守・運用管理の効率化は 仮想化による統合で解決

仮想化のキータクノロジーは「Hyper-V」と呼ばれるものだが、マイクロソフトの「ウィンドウズサーバー2008」にはこの仮想化機能が標準で入っている。その特徴は次のようになっている。第一にコスト抑制。サーバー統合により、例えば一台のハードウェアを二台にまとめれば価格は安くなる。だが、仮想化ソフトを導入すると十

分のコストがかかることがある。その点、ウィンドウズサーバー2008には最初から仮想化機能が標準で入っており、改めてソフトのライセンス料を払う必要がない。第二に既存環境との親和性。新しいシステムを入れる場合に、古いシステムも生かしたいという要望があるが、Hyper-Vは既存の仮想サーバーを活用することが可能だ。第三にパフォーマンス向上。仮想化は一つのハードウェア上に様々なOSを同時に動かせるため、パフォーマンスの低下を懸念する声がある。だが、「VM Bus」というテクノロジによって高通信信ができ、サーバーの性能を有効活用できる。第四に管理の効率化。業務ごとに異なるサーバーを使っていては目に見えて確認できるが、仮想化環境ではそれができないため管理はかえって難しくなってしまう。そこで、マイクロソフトでは包括的なシステム管理を実現する製品の提供を行っている。



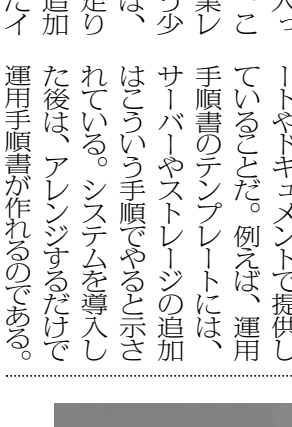
日本ヒューレット・パッカド
BLADEソリューション
推進部長
中村 隆之 氏

② プレゼンテーション ブレード一枚から始めるサーバー統合の実現

仮想化のメリットは、業務量の向上と、第四に運用コストの低減が求められていることである。これをすべて解決できるのが仮想化によるサーバー統合なのである。サーバー統合のメリットとして、省電力や省スペース、ハードウェアのスペースが足りなくなっていること、第二にエネルギー消費を大きく減らすことが求められていること、第三にハードウェアの性能を

合併後、大幅コスト削減と 処理能力アップを実績

完全に統合することによって、ITコストは売り上げの四〇から二〇に減少、年間エネルギー消費量は約一〇％減少、ネットワークコストは五



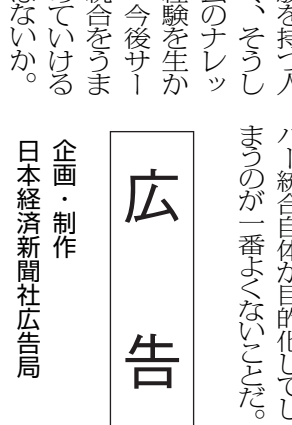
日本ヒューレット・パッカド
BLADEソリューション
推進部長
中村 隆之 氏

③ プレゼンテーション サーバー統合の目的と実践

近年、日本企業のIT部門が管理するシステムの数は増え続けており、ITも以前は業務を支援するツールとして考えられていたが、最近ではITの中心に位置するようになってきている。ITをビジネスに活用する手法の開発がこれまで以上に求められる。だが、これまでITインフラにかけたコストも手間をできるだけ圧縮し、その分をビジネスに回すことが必要になる。それに対する答えが、サーバー統合を促したIT共通インフラというものである。

共通ITインフラは 基盤統合からSOIへ

それがどれほど増えている状況か。共通ITインフラというものは、数多くのサーバーのミドルウェアやサービスを横に統合させたもので、ミドルウェアは自動化し、実際に業務レベルで運用されるのはほんの少し先になる。将来は、足りなくなれば自動的に追加するのではなく、自律化された運用手順書が作れるのである。



討論するパネリスト
五十嵐 光喜
中村 隆之
藤岡 良樹

仮想化のメリットは、業務量の向上と、第四に運用コストの低減が求められていることである。これをすべて解決できるのが仮想化によるサーバー統合なのである。サーバー統合のメリットとして、省電力や省スペース、ハードウェアのスペースが足りなくなっていること、第二にエネルギー消費を大きく減らすことが求められていること、第三にハードウェアの性能を

管理・運営コスト 削減には統合必要

「統合コストはどれだけの削減できるのか。ハードのコストと運用コストの削減を合わせて三〇％程度の削減を見込んで進めるケースは多い。藤岡 保守費削減は多い。だが、日本では途中のステップが抜けて「仮想化は、どこから始めるのか」と聞かれる。そこに問題があると認める。サーバー統合の具体的なメリットは何か。五十嵐 既存のリソースを必要に応じてフレキシブルに割り当てられることが非常に大きい。個別のサーバーではピーク時に合わせたリソースを個別に用意する必要があり、全体的に見ると無駄なリソースが多くなる。

「仮想化による統合で解決」... 仮想化のキータクノロジーは「Hyper-V」と呼ばれるものだが、マイクロソフトの「ウィンドウズサーバー2008」にはこの仮想化機能が標準で入っている。その特徴は次のようになっている。第一にコスト抑制。サーバー統合により、例えば一台のハードウェアを二台にまとめれば価格は安くなる。だが、仮想化ソフトを導入すると十分のコストがかかることがある。その点、ウィンドウズサーバー2008には最初から仮想化機能が標準で入っており、改めてソフトのライセンス料を払う必要がない。第二に既存環境との親和性。新しいシステムを入れる場合に、古いシステムも生かしたいという要望があるが、Hyper-Vは既存の仮想サーバーを活用することが可能だ。第三にパフォーマンス向上。仮想化は一つのハードウェア上に様々なOSを同時に動かせるため、パフォーマンスの低下を懸念する声がある。だが、「VM Bus」というテクノロジによって高通信信ができ、サーバーの性能を有効活用できる。第四に管理の効率化。業務ごとに異なるサーバーを使っていては目に見えて確認できるが、仮想化環境ではそれができないため管理はかえって難しくなってしまう。そこで、マイクロソフトでは包括的なシステム管理を実現する製品の提供を行っている。

既存リソースを自由に割り当て システム全体の無駄を省き効率化

「仮想化による統合で解決」... 仮想化のキータクノロジーは「Hyper-V」と呼ばれるものだが、マイクロソフトの「ウィンドウズサーバー2008」にはこの仮想化機能が標準で入っている。その特徴は次のようになっている。第一にコスト抑制。サーバー統合により、例えば一台のハードウェアを二台にまとめれば価格は安くなる。だが、仮想化ソフトを導入すると十分のコストがかかることがある。その点、ウィンドウズサーバー2008には最初から仮想化機能が標準で入っており、改めてソフトのライセンス料を払う必要がない。第二に既存環境との親和性。新しいシステムを入れる場合に、古いシステムも生かしたいという要望があるが、Hyper-Vは既存の仮想サーバーを活用することが可能だ。第三にパフォーマンス向上。仮想化は一つのハードウェア上に様々なOSを同時に動かせるため、パフォーマンスの低下を懸念する声がある。だが、「VM Bus」というテクノロジによって高通信信ができ、サーバーの性能を有効活用できる。第四に管理の効率化。業務ごとに異なるサーバーを使っていては目に見えて確認できるが、仮想化環境ではそれができないため管理はかえって難しくなってしまう。そこで、マイクロソフトでは包括的なシステム管理を実現する製品の提供を行っている。

企業・制作
日本経済新聞社広告局



この特集は日経アドネットからもご覧いただけます。
http://www.nikkei.co.jp/adnet